

前の原稿でマジョリー・ライスを取り上げたが、誰かから「ライスはキルトをやっていた」という話を聞いた覚えがあり、探してみたが見つけれなかった。しかしキルトは以前から興味があったので、少し言及してみたい。

キルトとは布地を重ね合わせて針と糸で刺縫い（キルティング）したもので、何らかのシルエットにカットした布地を刺縫いする場合はアップリケと呼ぶ。この素朴な手法が装飾の歴史にあらわれてくるのは中世以降で、ただの補強から飾り付けにも使われ始めた。以前、アフリカのクバ王国のアップリケを取りあげたが、ここではアメリカンキルトに焦点をあてる。なぜならば、現在もっともキルトが盛んにおこなわれているからである。

アメリカのキルトは 1980 年代、ヨーロッパからの東海岸入植者のうち、とりわけ家庭内の夫人たちによって始められた。用途は主にベッドカバーの飾り付けであり、サイズもそれが基準となって現在まで引き継がれている。しかし急速な工業化により安価な布製品が出回って、手間隙かけて作キルトは下火になった。ところが1900年代に入って、夫人が読む雑誌『アメリカン・ホーム・ジャーナル』や『ハーパース・バザー』などにキルト特集が組まれてから全国的な広がりをみせるようになった。そんななか、マリー・ドアティー・ウェブスターというキルト作家が登場してくる。ウェブスターは『キルト、その物語と作り方』という本を書き、ホームビジネスから会社設立というビジネスモデルを確立させた。その穂ウェブスターと同じビジネスモデルで、マッキム、オール、クレツィンガーなどの有名人たちが現れてブームを牽引した。1934年の調査によると、400種の大都市の新聞がキルトを定期的に掲載しており、6都市の調査によると、キルトのコラムが日曜日の一番人気のある記事であり、女性読者の32%が読んでいたという。これは新聞の調査であり、雑誌でのキルト記事もあわせると読者数はさらに上乘せされる。新聞雑誌では新しいトピックスが求められるので、常に新しいデザインの需要があったのである。

伝統工芸品のなかでも布関連は女性たちに営まれている場合が多い、ヨーロッパの刺繍、ペルシアの絨毯、わが国の織物など担い手の多くは夫人である。歴史が浅く伝統工芸がなかった入植者たちにおいては、このキルトをアメリカン・クラフトのひとつにしたいとの思いもあったかもしれない。19世紀はじめの頃から地域・郡・州レベルでのコンテストや展覧会が催されて、技術や表現の向上がはかられてきた。現在では全国コンテストで本職のキルト・アーティストたちが競い合うようになり、アメリカは名実ともにキルト大国となった。

さて下に最も初期の頃のキルト作品をのせる。現代キルト作家のアート作品には畏敬の念を抱きつつも、私は初期の頃の素朴で温かみのあるデザインが好きだ。私は鳥や魚や動物のシルエットによる敷き詰めデザインを考える際、意外に思われるかもしれないがこの頃のキルト・デザインを意識している。30年以上前になるが、ワコールがアメリカン・フォーク・アートのテキスタイル製品を出していて、それがとても記憶に残っている。



図1. 1850年ペンシルバニア州のキルト



図2. 1858-63年ニューヨーク州のキルト

1778年、ハワイは西洋人に発見された。キャプテン・クック率いるイギリスの帆船が、南太平洋のタヒチを発つてカムチャッカをめざす初の北太平洋縦断の航海中に、ハワイを発見して寄港したのであった。クックの船には当時最新科学の結集である六分儀・羅針盤・海図・クロノメーターが配備され、長期航海で船員の健康を脅かす壊血病の対策として麦芽・塩漬キャベツ・レモンジュースなども積まれていた。クックを迎えたのは島に住むポリネシア人たちで、当時のハワイ諸島全体では25万人が暮らしていたという。そして住民たちは西暦500年あたり（日本でいえば聖徳太子の頃）から素朴な双胴のカヌーに乗って、肉眼でみえる太陽・月・星の位置から進路を定めて風と海流で進む航海術で、南太平洋の島から広大な大海原を渡ってきたのであった。

ひとたび西洋の海図にハワイが記されると、イギリス、フランス、アメリカが競って立ち寄るようになり、ハワイは日本の幕末のような状況に陥った。当時のハワイは3つの王国が分立していて覇権を争っていたが、白人から武器を調達したカメハメハが統一して大王となった。以後一族が王位を継承していったが、やがてカメハメハとは血縁関係のないカラカウアに引き継がれた。知力にたけたカラカウアは数々の偉業を成し遂げたが最後の王ともなった。

さて、同時にハワイを訪れたアメリカのプロテスタント宣教師が以下の記録を残している。

〈最初の「お裁縫の講習会」は、太陽がさんさんと照りつけているハワイ島で始められました。カラカウア女王が会長となり、7人の白人の女性（宣教師の妻達）に、サディアス号の船上デッキのマットの上に一緒に座るように言ったのです。リーダーとなったホルマン夫人とラグレス夫人は、はさみと材料を準備しました。4人のハワイの女性たちは、キャリコのパッチワークをしました。それは彼女達にとっては初めての経験でした。〉また別の神父の報告には〈ワイメアの女性達の家の横にはキルトが掛けられている。彼女達は家庭内工業でキルト作りに追われ、これが産業の振興に結びついている〉と残されている。

他に1878年に日本を訪れて『日本奥地紀行』という紀行文を出版したイギリスの女性旅行家イザベラ・バードも、日本に来る前の1873年にハワイに滞在しており次のように書いていた。〈カヤのかかった4本柱のベッドの清潔なブルルンマットレスは、リネンのシーツで覆われていた。上に掛かっている美しいキルトの真ん中にはグリーンの葉のリースが入り、周りに古風なアラベスクのパターンがデザインされている。地元の女性が巧みにパターンと配色を駆使して作ったものだ〉。これらの記録から、西洋人寄港とともにキルトが根付きはじめたことがうかがえる。

カシミア・ショールでもそうだったが、王族の夫人たちが普及に与える影響力は絶大だ。その後の文化・商業的發展には言及しないが、現在、観光立国となったハワイではキルト、そしてアロハシャツが大人気だ。ハワイアン・キルトの特徴は、下の写真のようにp4m対称で型どられた大胆なハワイアン植物モチーフにあり、アロハ・スピリッツに包まれることができる。イスラムの精緻な幾何パターンデザインもよいが、こういうゆったりしたデザインも捨てがたい魅力がある。



図1. プアミウラナ きんこうぼくの花、1906年頃



図2. モンステラの葉、1967年